同年十二月十日天保ト改元

一 文政十三寅年七月二日京都大地震ニ付安否大木
市左衛門より申越候書面写

一 七月二日夕七時過ゟ地震家ゆりハ少し申候初メ
ちと参りし申候ゆり出し申候中ニ隣小屋ハ居兼庭ニ
出候処しくしく出候処益募り鴨居天井落ち
家々大小と抱へ候小屋ゆ無事又ハ広き場所
へ一己都合米蔵屋根瓦瀧の如く落西小屋供
居候弁少々時ニ申りつふし外ニ出候

間ニ合兼候ものハさしかけ置候ニ付損不申候処
御上ケ御本丸ヘ入候惣銅ニ御門の方倒レ
かゝり続候櫓御天守台所ニ損シ候処
揚通り不残ニ三寸つゝ其外御櫓中なるハ川
御山里門一面ニ小蜘の巣のことくしわみこれ有候
西御丸御小屋裏高塀ニ上幅弐尺程ゆるみ有之
弐拾間余之御土居ニ崩見えも御堀之方ニ今ニも
倒レ可申様ニ相成候程ニ御座候其外
御大手敷橋石垣一丁余右倒レ申上の土塀も

倒レかゝり中仕切御門其外続石垣弐間程
崩れ申候三尺程石崩有之西御門茂
損シ往来相成かね候程一人ニ而急き
通り来斗かしつて居ひゆらゆらし西御門続
御土居上塀倒レ御城外入堀通り御廊下橋
入口御門ひかミの所ニ土塀拾間斗程倒レ崩候
御厩曲輪通り御番所塀不残ひしきこれ有
候御倒レ東御門大手不残土塀大てい倒レ御
被損候御山里ニ一ヶ所崩レ東御門其外石垣押出し候

三日夜ハ外ニ寝申候様子ニ候ヘ共静ニいたし候故
のこり居候者ハ土御門陰陽師より京都見代ハ有之
候上終日地震ニて有之候得共ニて有之候ニ付
なく候やう只今名勝をひ申候様ニ御座候
事ハ未曾有之儀ニ御座候今日も二日二夜
野宿いたし居候今ニ震動いたし候事ニ付今晩も
野宿之覚悟ニいたし居候先は荒増如此御座候以上

七月四日

当地一昨二日申刻ゟ大地震ニ而誠ニ不容易大揺動ニ而

御座候京中一統表ニ出候而少しも離し不申候
白河院百年以前年代記ニ有之候趣
去ル五日二夜ニ候京師一統之儀ニ御座候
伊予行と申候ハ家ハ御座候去蔵及大破
御座候土蔵瓦も落散割崩候ニ二日夜ゟ
三日夜迄も震ひ不申候と何とも
御座候得共不残地震ニ付
御所并ニ雑具ニ至迄地ニ落
二ハ無之候ニ付御所并御造営

様人務ル困り危急ニ通一日も早く打死と覚悟仕候

貴殿ト申ル此度之籠城ニ上様へ不可源ヲ以貴殿無御

ヲし左衛門殿出ヲ勤務ニ候而ニ不可成義ニ

ハ家康殿追悪之節同前之様ニ枚金仔細ヲ存候ニ内意

申越ル候先二心ハ士之非本意候而目も不存ニ候先

入金ヲ月々と送リ無之非事之由及存候ニ付香様

帰存之様申ヘ共ニ不扱付太刀ハ家康へ我等十二才之時

元服之為祝儀給ハ候ニ而ヲ年八旦家康ニ相成

之大業相ニ不来ル候之処中来ハ我等相成之戦ニ付ケ方

為一度ハ其覚悟依之大坂ニ名を今ニ通不移候ハ

仍先進ハ陣ニ而相戦ヘ候而一城の中ニ有之ニ一時も

無之ニ相果之候も無之代人同前ニ可致ニ候ヘ

御姉ヲ御股ヲ根ヘ申し付候旨相成之宜ヲ之訳ヘ申候ハ

無之非ル中ニ候へ共此事ニて

四月廿日

木村長門守

猪俣左馬介殿

御床下

一 右之段言上仕候亡主内通儀及御聞ニ候通右之春也

引越候ニ付宜敷由従江戸表注進同廿二日京都より来候
私共上ハ御一同様も無之時節ニ相成候而万端之一変致
右体ニ付相成候とも合期儀八月二日京都より之同十日ニ
江戸着何之沙汰ニも及候右一巻御中納言様御意を得度迄之
殊之外入組たる分も御座候間不勝手候得共依而重而
戌御中納言殿御座候ニ存知居候ニ付而此一紙取置候掛着
之命ニ及河村忠左衛門殿迄右之取計候右一巻以後ハ為後
書書候此度為御心得如此御座候恐惶謹言

十二月廿日

堀部安兵衛
武庸（花押）

溝口祐阿様
上田宗貞様
坂井又太夫様
坂井九太夫様
窪田吾左衛門様
堀市郎兵衛様
河村又太夫様
河村忠左衛門様

坂井惣左ヱ門様
石林十之助様
古橋
小羽平へ